吾輩は猫である　(わがはいはねこである)

夏目漱石の最初の長編小説。1905年(明治38)1月から06年8月まで，〈ホトトギス〉に断続的に発表。上･中･下巻として1905‐07年刊。文明中学の英語教師苦沙弥の家に飼われている猫の目を通して，同家に出入りする美学者の迷亭，物理学者の寒月，新体詩人の越智東風ら〈太平の逸民〉の超俗ぶりを，実業家の金田一家に代表される世間との対比によって描く。彼らの間に交わされる駄洒落や，滑稽なエピソードが読者の笑いをさそう。その滑稽味のゆえに，発表当時，〈高等落語〉(上司小剣)とも評された。たしかに江戸っ子漱石の生地であった江戸町人の軽口，駄洒落は〈落語〉の笑いに通じるが，それが〈高等〉であるゆえんは，知識人漱石の深い厭世観に根ざす文明批評が，滑稽味と独特に混合しているからである。

桶谷 秀昭

(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.